JR福知山線脱線事故を心に刻むための本

世界一安全と言われた日本の鉄道の安全神話を根底から覆し、安心を不安に変える痛ましい事故が起こった。死者一〇七名、負傷者五〇〇名を超える大惨事となったJR西日本・福知山線の列車脱線事故である。どんな地震でも絶対に倒れないと言われ、しかし倒壊した阪神高速道路の高架や、絶対に安全であると言われ続けながら臨界事故を起こした原子燃料加工工場の事故を思い起こさせる。いずれも、安全が崩壊し、安心を不安に変えた出来事であった。

安全をどう確保するか、また、安心は何によってもたらされるのか。そんな難題に正面から挑んだ書籍が『安全と安心の科学』である。著者の村上は早くから「安全学」を訴えた一人であるが、この本は身近な自動車事故から科学技術の粋を集めた原子力の事故に至るまでさまざまな事例を挙げながら、安全と安心を考える機会を与えてくれる。

今回の脱線事故の正確な事故原因については航空・鉄道事故調査委員会の報告書をまつべきであるが、事故後の報道ではJR西日本の「安全文化（企業風土）」に問題があったことを指摘する論調が多くみられる。JR西日本が「安全を最優先する企業風土の構築」を今後の最優先課題として挙げていることからも、事故原因の一つとして確からしいようである。

キーワードだけが先行する感のあるこの「○○風土・文化」であるが、その本質や具体的な対策はわかりにくい。専門書の部類に入るかもしれないが『組織事故』には、チェルノブイリ原子力発電所事故以降、盛んに唱えられるようになった「安全文化」という言葉を、実践に移すための具体的な方策が盛り込まれている。この本でも解説されているが、風土を変えるという試みは、事故の当事者を責めても意味がないという思想に基づく。同じような状況に置かれれば誰でも事故を起こす可能性があるという前提で、組織のシステムとして安全を管理する姿勢である。

しかし、さらに考えを進めると、事故の原因を一企業のみに帰属することで安全は守れるだろうか、という疑問がわく。このような観点から今回の事故を考えるとき、日本の鉄道の定時運行の歴史と現状に多くの資料に基づいた独自の考察を展開する『定刻発車』からは、鉄道事故の遠因、すなわち「列車は定刻に発車し定刻に到着して当然」という社会の意識を、読み取ることができる。信楽高原鉄道における列車衝突事故では、定時運行への乗客の要望に応えようとしたがために、本来最優先されるべき安全が軽視されたことが事故原因の一つとされる。

今回の事故に同じような影響があったとすれば、これらの事故からは「組織事故」と同時に、「社会事故」とも呼ぶべき別の側面が見えてくる。社会システムの改善をも対策の一つに挙げる必要があることを指摘したい。

謝罪も釈明もかなわぬ運転士と、命を奪われた数多くの乗客、さらに事故の後遺症に苦しむ無数の負傷者、それらすべての家族・関係者と同じ苦しみを繰り返さないために、個人、組織、そして社会というそれぞれのレベルでの努力を求めたい。 P

『定刻発車』
三戸祐子著
新潮文庫
本体価格590円+税

『組織事故』
ジェームズ・リーズン著
塩見 弘監訳
日科技連
本体価格4200円+税

『安全と安心の科学』
村上陽一郎著
集英社新書
本体価格680円+税

宮城学院女子大学助教授
大橋智樹＝文
text by Tomoki Ohashi

1971年、東京都生まれ。98年東北大学大学院文学研究科博士課程心理学専攻単位取得後、退学。日本学術振興会特別研究員、(株)原子力安全システム研究所を経て現職。博士(文学)。